

K-805

山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書第5集

北作古屋敷館跡

発掘調査報告書

1997. 3

山辺町教育委員会

北作古屋敷館跡

発掘調査報告書

1997. 3

山辺町教育委員会

序

この報告書は、山辺町大字北作字古屋敷にあった中世館城跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

山辺町の山間部には、慶長5年（1600）に激しい戦場となった畠谷城を始め、いくつかの館跡があります。これらの館跡は、戦国時代に最上氏・伊達氏・大江氏・上杉氏などの争いのときに築かれたといわれており、今回発掘調査した館跡もそれらの中の一つと見られております。

この館跡のあるところは、朝日町と山辺町が接する高台で朝日連峰や朝日町などがよく見渡せる眺めの大変よいところです。また、すぐ近くを両町を結ぶ古道が通っているところで、城館を築くのに絶好のところだったのでしょう。

ただ、この館跡は西山形変電所建設設計画に伴う埋蔵文化財分布調査により平成7年6月に初めて発見された遺跡で、それまでは地元の方々にも郷土史を研究されている方々にも、その存在が知られていなかったそうです。そのため、県から最近出版された「山形県中世城館遺跡調査報告書（村山地域）」には載っていない館跡になります。

この度の調査は、変電所建設設計画が具体化したため、遺跡の記録保存を目的に緊急発掘調査を実施したものであります。発掘調査に当たっては、地元の方々のご協力を始め、発掘を指導してくださった茨木光裕氏と発掘にご協力をいただいた方々、並びに調査工事等にご支援いただきました東北電力株式会社に対し厚く感謝申し上げます。

平成9年3月

山辺町教育委員会
教育長 峰 谷 四 郎

例　　言

- 1 本書は、東北電力株式会社西山形変電所新設工事に係る「北作古屋敷館跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、東北電力株式会社山形地区基幹送電線立地事務所の委託により、山辺町教育委員会が主体となり、平成8年5月7日から同年7月10日までの期間で実施した。
- 3 調査体制は、下記の通りである。
　調査総括　蜂谷四郎（山辺町教育長）
　調査担当　茨木光裕（日本考古学協会員）
　調査員・補助員　工藤一夫　後藤礼三　佐藤繼雄　佐藤太助　三浦浩人　村山賢司
　調査参加者　奥山兵藏　麵口伊藏　高橋玄寿　麵口吾一　渡辺丹次郎　高内又次郎
　遠藤節子　佐藤愛子　鈴木稔　伊藤貢三　大沼洋司　菅野豊　吉田明洋
　三部秀聰　松田智恵子　茨木恵美　鈴木裕美　松田多恵子　田中奈美子
　調査事務局　山辺町教育委員会
　長岡順吾　渡辺直好　峰田順一　安孫子正治　青木稔　武田忍　垂石敏子
- 4 発掘調査にあたっては、東北電力株式会社、武田真也〔武田組〕、峯田要の各機関、各氏より協力を得た。
- 5 本書の作成・執筆は、I、III、IV-2、IV-3を茨木光裕、II、IV-1を後藤礼三が担当した。編集は、茨木光裕が行った。
- 6 調査記録、写真等は、山辺町教育委員会が一括保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。
　SD…溝跡　SK…土壤　SM…土壘　SX…性格不明遺構
　ED…遺構内溝跡　EP…柱穴
- 2 遺構番号は、分類記号を符した通し番号とした。
- 3 指図に記してある方位は、磁北を示している。
- 4 グリッドの南北軸の方位は、N-19°50' -Wである。
- 5 遺構の実測原図は、1/20である。挿図は、適宜縮小しスケールを図示した。
- 6 土層の色調は、1995年後期版「新版標準土色帖」に準拠した。

目　　次

I	調査の経緯	
1	調査に至る経過	1
2	調査の方法と経過	3
II	遺跡の立地と環境	
1	地理的環境	4
2	歴史的環境	5
III	検出遺構	
1	遺構の分布と遺存状況	8
2	各調査区の概要	
(1)	Aトレンチ	9
(2)	Bトレンチ	10
(3)	Cトレンチ	11
(4)	D区	11
(5)	Eトレンチ	14
(6)	F区	15
(7)	Gトレンチ	16
(8)	H区	17
3	主要遺構	
(1)	空堀と曲輪	19
(2)	虎口1	20
(3)	虎口2と土橋状遺構	21
(4)	虎口3	21
(5)	建物跡〔SB11〕	23
(6)	落とし穴・土壤	25
IV	まとめと考察	
1	周辺的主要城館跡	26
2	本城館跡の様相と性格	28
3	まとめ	33
	参考文献	33

挿 図

第1図 遺跡全体図	2
第2図 遺跡位置図	7
第3図 主要遺構配置図	9
第4図 Aトレンチ平面図・土層断面図	10
第5図 Bトレンチ平面図・土層断面図	12
第6図 Cトレンチ平面図・土層断面図	13
第7図 D区遺構配置図	14
第8図 Eトレンチ平面図	14
第9図 F区遺構配置図	15
第10図 Gトレンチ平面図・土層断面図	17
第11図 H区遺構配置図	18
第12図 館跡概要図	19
第13図 虎口1付近平面図	20
第14図 虎口2付近平面図・空堀土層断面図	22
第15図 虎口3付近平面図	23
第16図 建物跡(S B11)平面図・柱穴土層図	24
第17図 土塹平面図・断面図	25
第18図 桅の峯館遺構図・築沢館周辺図	30
第19図 煙谷城遺構図	31
第19図 煙谷城・築沢館遺構図	32
第20図 周辺地域の城館跡分布図	34

図 版

図版 1	遺跡遠景	遺跡近景	曲輪I近景(調査前状況)
図版 2	空堀B調査状況	H区調査状況	実測作業風景
図版 3	D区全景	F区全景	G区全景
図版 4	虎口1付近近景	虎口2と土橋状遺構	虎口3近景
図版 5	S K7完掘状況	S K5完掘状況	F区傾斜変換部の落ち込み状況 同上土層断面
図版 6	空堀B土層状況	S B11全景	E P37完掘状況 E P36完掘状況

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

山辺町作谷沢地区は、山形盆地の西に連なる白鷹丘陵を登った山中に位置する集落である。丘陵頂上部にある畠谷、作谷沢、大藪の各地域は、それぞれに、周囲を丘陵に囲まれた小盆地状の景観を呈している。館野の集落は、作谷沢地区の沢下からさらに丘陵地に入った地域に位置し、集落背後の丘陵は、北に向かって尾根状に張り出している。丘陵の標高は、概ね370~410mである。

㈱東北電力では、基幹送電線の建設に伴い、館野地区の丘陵地一帯に、西山形変電所の新設工事を施工することになり、埋蔵文化財の所在確認の依頼が、山辺町教育委員会にあった。当該地域には、これまで周知されている遺跡は確認されていないが、開発予定地域が広範囲であり、工事によって尾根上の高台が削平され、大規模に地形が改変されるため、山辺町教育委員会では、新規の遺跡の有無を確認するための分布調査を実施した。

分布調査は、平成7年6月に変電所新設敷地、および取付け道路の路線について、地形の状況から遺跡が立地する可能性がある地点を抽出し、その地域について踏査と一部試掘を行った。

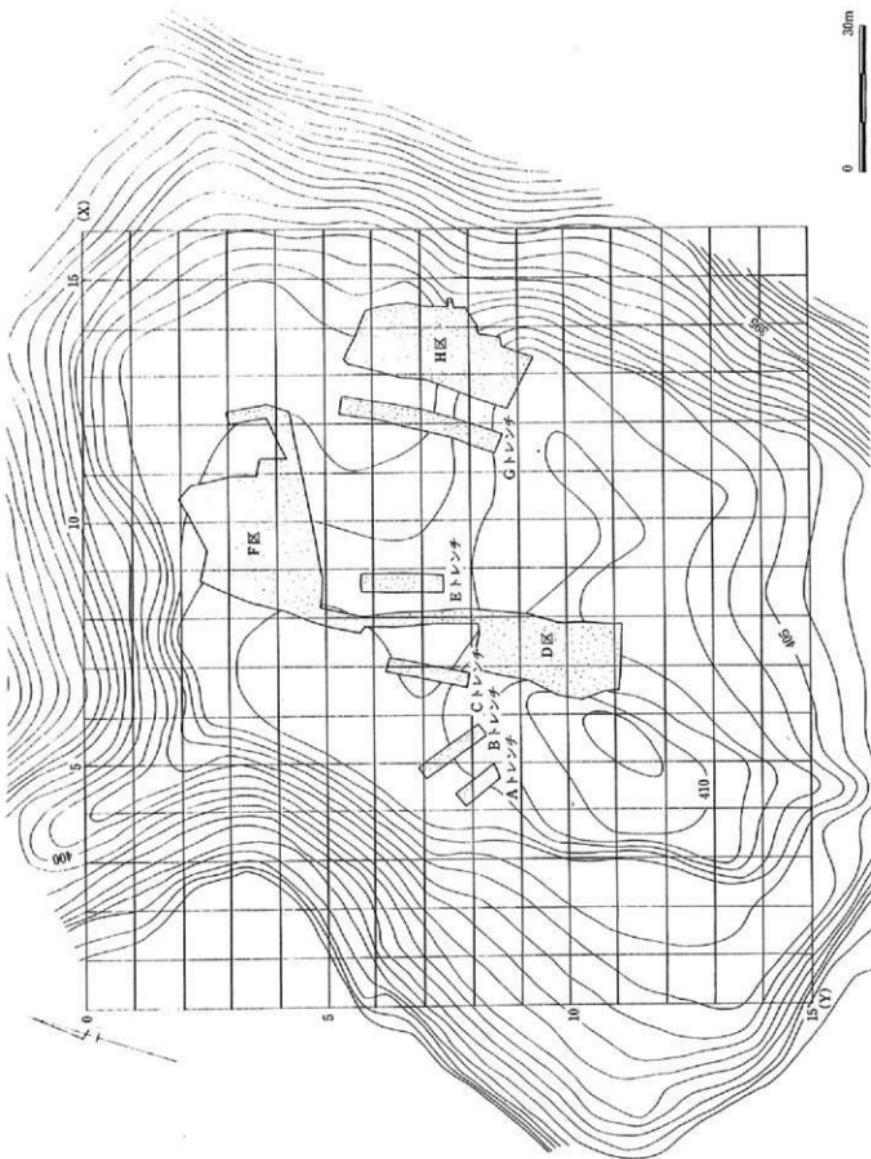
その結果、館野地区の古屋敷地内から、中世の城館跡と考えられる遺跡が新たに発見され、「古屋敷跡」として新規に遺跡登録を行った。外の開発予定地域については、特に遺跡として認知できる地点は確認されなかった。

分布調査の結果を受けて、古屋敷跡の様相を把握するため、同年9月に、約1週間の期間で、確認調査を実施した。調査は、主席と考えられる高台の周辺部に4本のトレンチを設定した。その結果、台地の裾部を通り、北に張り出す尾根に沿って登つて来る山道を分断するような状況で、堀跡と考えられる大規模な落ち込みが確認された。その堀跡内の覆土の堆積状況は、断面中位に旧表土と思われる凹んだ黒色土があり、その上部に地山土や樹根を含む再堆積土が認められた。この付近一帯は、現在荒れ地や雜木林であるが、以前、桑畠として利用されており、畠地を造成する際に、かなり改変されており、本来、凹地状であった堀跡部分を埋めて平場を造成している状況が把握された。

事業主体である東北電力株式会社と町教育委員会では、確認調査の成果を検討し、県教育委員会の指導を受けて、両者で協議し、変電所施設の建設は、基幹送電線のルート上、変更することは不可能であり、記録保存を前提とした発掘調査を実施することにした。

発掘調査は、平成8年5月7日から同年7月10日までの予定を行い、ほぼ予定通りに終了することができた。

調査に際しては、川崎利夫(県立うきたむ風土記の丘考古資料館館長)、伊藤清朗(山形大学教授)、普田慶信(県立山形東高等学校教諭)、吉野一郎(山形県南陽市教育委員会)の諸氏から指導・助言を頂いた。



第1図 遺跡全体図

2 調査の方法と経過

古屋敷館跡は、山形県山辺町大字北作、館野地区の古屋敷地内にあり、館野集落の背後に連なる丘陵が、北西に向かって張り出した尾根の先端部に立地する。館跡がある地域は、標高410m程の台地状の高台で、比較的平坦な地形となっており、その東と西の両側は、急斜面となって麓の沢に落ち込んでいる。

また、この台地の先端から北西に連なる尾根道を下ると、朝日町の下芦沢に至る。下芦沢の館山には、大江氏の要衝の一つである鳥屋ヶ森城があり、古屋敷館跡は、このルートを塞ぐ高台に築かれた城館跡といえる。

調査は、前述したように、記録保存を前提したものであり、開発予定地が広範囲にわたるために、全体に10m四方の基本となるグリッドを設定し、努めて、館跡の全体的な様相が把握できるように、ほぼ全域に渡ってバックホーを使って表土の剥離を実施した。

調査の行程は、平成8年5月7日より開始し、樹木の伐採の後、調査区を設定し、重機を使用して、表土の除去を行った。各トレンチについては、畠地造成の際に、かなり埋め戻されているため、重機により遺構面まで深堀を実施した。

面整理の結果、台地の高台部は、以前の造成によってかなり削平されており、遺構は、その際にほとんど破壊され、城館跡に係わるものは、検出されなかった。従って、台地の高台部から一段下がった地点に、D、F、H区の各調査区を設定し、精査を行った。また、A、B、C、E、Gの各トレンチでは、確認調査の際に検出された壙状の落ち込みについての検出を目的として調査を行った。

調査面積は、表土の剥離を実施した区域を含め、約15,000m²、遺構精査および完掘面積は、約7,000m²である。

遺構の精査は、面整理が終了した東側の最奥部に位置するH区から開始し、西にある道路に向かって、調査区の表土除去と並行して、順次実施した。全体の精査が終了したのは、6月末であった。

記録作業は、全体の精査が終了した7月から開始し、D、F、Hの各調査区については、グリッド杭を用いた1m方眼の簡易造り方を設け、1/20縮尺の平面図、各遺構の土層断面図を作成した。A、B、C、E、Gの各トレンチについては、平板測量により、1/40、および1/60縮尺の平面図、1/20縮尺の土層断面図をそれぞれ採録した。

発掘調査の終了に際し、調査成果を地元の方々、関係者に理解していただくため、記録作業がほぼ終了した7月5日に、調査説明会を現地で行い、雨天にもかかわらず多くの参加者があった。その後、7月10日まで、補足的な記録作業、写真撮影を行い、同日に現場を撤収した。現在、工事の進行に伴い、調査対象地の台地一帯は削平され、変電所用地として造成が進められ、当該城館跡は消滅した。

現場で作成した図面や、写真等の記録の整理は、調査終了後、隨時行い、平成9年1月より、報告書の作成にはいった。なお、調査地域が以前にかなり改変されていることもあり、後述するように、D区で検出された落とし穴に伴う刺片が若干出土したのみで、特に城館跡に関連する遺物は認められなかった。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

作谷沢地域（旧作谷沢村）の位置は、北部・西部に広がる大字北作、南半分を占める大字畠谷、中央部の大字築沢の三地区から成立し、山辺町の西方山間部の南半分を占めている。北作地区的北部は山辺町中地区（旧中村）であり、西部は朝日町宮宿地区（旧東五百川村・宮宿町）に接し、北東部は玉虫沼周辺を越えて山辺町と往来していた。築沢地区的東部は山形市大曾根地区（旧大曾根村）であり、畠谷地区的東部は山形市村木沢地区（旧村木沢村）、柏倉・門伝地区（旧柏倉門伝村）、南部は白鷹山地を越えて南陽市吉野地区（旧吉野村）になり、西部は白鷹町白鷹地区（旧白鷹村）と接している。

南端部にそびえる標高994mの白鷹山から北東方向に片倉山（標高733m）、東黒森山（766m）、雷山（518m）、北方向に三森山（801m）、西黒森山（846m）などの山々があり、数万年前の白鷹火山の大噴火やその後の地殻変動によって現在の地形が形成されている。こうした変動とともにあって白鷹山から東北方向にかけて大沼、荒沼、琵琶沼、苔沼、曲沼、巫女沼、櫛口沼、などの通称「白鷹山四十八沼」と呼ばれる多数の沼が存在し、景観に彩りを添えている。

北作地区を構成する各地域は標高360mから400m、畠谷地区は標高460mから480mを中心とし、築沢地区は標高370m前に位置している。山形市を中心とする山形盆地の標高を約100mとすると、約300m以上の高度差があり、これは気温にして約2度の違いとなって生活や産業に影響を与えてくるものと思われる。つまり、同じ降雪量であっても低温による融雪量に大きな差が出てくるし、こうしたことはその後の農耕の場に影響をもたらすのである。北作・櫛口字右衛門家の過去帳によると、宝曆五年（1755）は冷害によって奥羽地方は大凶作になっているが、北作・畠谷・築沢の三か村では山間部のこととて特にひどく、7月までに136人の餓死者を出している程である。

「館野・古屋敷」の立地する地域一帯は、大字北作の西北端に位置する館野地区の、さらに北部に展開している。地区的北端にある標高411mの小丘とその周辺を利用した構築になっていて、周囲には遮るもののがなくて見通しの良い、高い場所を占めている。南方には直線距離約2.5kmの地に山形・最上氏の側に立って、特に置賜・伊達氏の侵攻に備える畠谷城があり、地域の中心として境目の城となっていた。

西北方向に約2km下っていくと谷底部の地域に下芦沢地区があり、北から南に、東五百川地区東端の峡谷に位置する送橋へ下芦沢～上芦沢～水本・撰待～中山、と通する水本街道が走っている。谷底を上った西北方の山上に、古屋敷館から直線距離にして約2.5kmという近い位置に古屋敷館と似た標高400mの宮宿地区・館山がある。ここは山形・最上氏と並立する寒河江・大江氏の側に立つ宮宿・鳥屋カ森城主・岸氏の居城となつた要害の地である。

東方には直線距離で約2kmという近い位置に寒河江・大江氏側に立つ大森・荒谷館が立地する館の峰（標高486m）があり、その間の谷底状低地を鶴川・沢上川が北流して送橋地

区を経て最上川に注いでいる。

各地区に通する交通網という観点で道路の状況を見ると、館野～古屋敷館～下芦沢、と東五百川郷に通ずる道路が古屋敷館のすぐ下を通り、約2km下りていった西方には、送橋～下芦沢～上芦沢～水本・撰待～中山～荒砥・鮎貝、と通ずる水本街道が走っている。さらに山形盆地からの、山辺～北作～撰待、と通ずる街道が撰待南で合流し、その他に、山形～築沢～畠谷～撰待～中山、山形～門伝～畠谷～撰待～中山、と通ずる街道などがあり、通称「狐越」と呼ばれる山形～門伝～磼石～嶽原～撰待と通する間道もあった。このように北作・畠谷・築沢地区には村山（最上）地方と置賜地方を結ぶ主要な街道が數本走っており、両地方を結ぶ交通上の重要な地区となっていた。そして、古屋敷館は、宮宿・鳥屋カ森城と大森・荒谷館の両者を監視しつつ、送橋～芦沢～水本～中山間の水本街道をも監視する絶好の位置にあったのである。

2 歴史的環境

文治5年（1189）、源頼朝による平泉・藤原氏の滅亡後、鎌倉幕府配下の御家人が地頭として移住してきた。源頼朝を補佐し、幕府公文所別当、さらに初代の政所別当となった大江広元の長男親広の系統が寒河江庄に移り、後に寒河江氏を称し、次男時広の系統が長井庄で長井氏を称した。鎌倉幕府で有力御家人の一人である安達盛長の次男時長は大曾根庄の地頭となっている。

元弘3年（1333）の鎌倉幕府滅亡により始められた建武新政は、建武2年（1335）足利尊氏がそむいたことにより早くもくずれ、南北朝時代に入った。出羽国も南朝方と北朝方との激しい対立が各地で広げられた。寒河江氏は南朝方に立ち、長井氏は同じ大江一族ではあっても北朝方であった。出羽国の安国寺が寺伝によると延元4年（暦応2）（1339）斯波兼頼によって夢想国師を開山として山辺町大寺に設置されているが、寒河江・大江氏との接点に位置した場所であり、これも北朝方の勢力拡大をその目的の一つにしていたと見られている。ただし、安国寺の設置年代については正平14年（延文4）（1359）という説もある。

正平11年（延文元）（1356）斯波兼頼が最上・山形に入部したので北朝方が有力な情勢に変化したものであろう。斯波氏はその後、地名により最上氏と称している。正平23年（応安元）（1368）、「漆川の戦」があった。圧倒的に優勢な北朝方・斯波軍の攻撃を受けた大江一族は大江町本郷・諏訪神社を中心とした「漆川の戦」で破れ一族六十一名が自害し、後を継いだ大江時氏は北朝方に降り、以後は寒河江氏を称するようになった。天授6年（1380）、伊達宗遠が長井庄に侵入し、置賜地方は多く伊達氏の支配下に入った。大永2年（1522）には伊達宗宗が陸奥守護職に任命されている。

作谷沢地区もこうした情勢の変化の波にさらされてきている。伊達家の記録によると、伊達家では荒砥・鮎貝地区を拠点として何回も作谷沢地区に侵入し、その度に地区の数多くの人々が焼き払われ、田畠が荒らされるのが常であった。

この伊達氏による作谷沢地区侵入の時に構築されたものか、慶長5年（1600）の関ヶ原

の戦いにおける上杉勢の侵攻時に設営されたものか、土壘・陣地などが畠谷城を窺うように周囲に幾つか存在する。第一は三森山見張所・監視館で中腹から山顶にかけて五か所に畠谷城を見下ろし、畠谷へ上郷へ中郷へ撰待へ、と通する道や、大平へ猿原へ撰待へ、と通ずる通称「狐越」など、各街道を掌握できるような地に設営されている。次は、鎧坂土星群で、畠谷城の立地する館山より30~50mほど高地にあり、数百mに亘って壮大な土壘を構築し、所々には空堀を用意して備えを固めている。

こうして、作谷沢地区の西南方向に当たる置賜地方の荒砥・鈴貝地区は伊達氏の勢力圏であり、西北方向の宮宿・五百川地方は寒河江・大江氏の支配下にあった。山形・最上氏の支配下にある畠谷城は三者の接点に位置していて最前線の基地となる境目の城として重要な役割を持ち、置賜地方への諸道を監視する交通上の要地となっていたのである。

畠谷城の東北方向約1kmの盆地状の築沢に築沢館があった。周囲は東西が約90m、北東約60m、北西約70mに過ぎないが、小丘であり、部分的には約20mの高さであり、街道の監視には便利な位置にあった。同じ山形・最上氏配下にあって畠谷城と連絡しつつ、補完的役割を果たしたものであろう。しかし、どういう豪族や武将が詰めていたのか、伝えるものは何もないのが実情である。

畠谷城から西南西方向直線距離で約3kmの撰待地区の南部に一辺50m足らずの小丘に撰待館があり、土屋氏が居住し、同じく山形・最上氏の側に立っていたといふ。関ヶ原の戦いにおける上杉勢の、荒砥から畠谷城への侵攻に当たっては、畠谷城の江口氏に合流して奮戦したと伝えられている。

この畠谷城の支城としての役割を受け持ったのが「館野・古屋敷館」であった。身近な西北方向に宮宿・鳥屋カ森城があり、木曾義仲の末裔と称する岸氏が居城としていた。直線距離で東方約2kmの地には大藤・荒谷館があり、これは鳥屋カ森城の最前線基地としての役割を受け持ち、相互に監視し合っていたのである。したがって古屋敷館では朝夕、西北・鳥屋カ森城と東・荒谷館を監視し、諸道を見張っていたものであろう。

以上のことから、中世の館野・古屋敷館の歴史的地位と果たしてきた役割については以下のようにまとめられる。

- (1) 置賜・伊達氏と寒河江・大江氏に備える境目の城として、山形・最上氏の最前線基地であり、村山地方と置賜地方に通ずる諸街道の監視に当たっていた畠谷城の、さらに支城としての地位にあってその補完的役割を果たしていたものと思われる。
- (2) 直線距離で西北約2.5kmという近距離に、寒河江・大江氏側に立つ宮宿・鳥屋カ森城や東方約2kmの地に大藤・荒谷館があり、情勢を把握できる絶好の位置に立地しているので、山形・最上氏側に立てる監視に当たっていたものである。
- (3) 館野・古屋敷館からは下芦沢地区への道を通じており、更に水本街道が西部低地を連絡しているのを一望にできるので、山形・最上家側からも、寒河江・大江家側からも交通上の要地として重要な位置を占めていた。
- (4) 古屋敷館に詰めていた部将やその配下の人々は、近くの「館野地区」や「小針生地区」に居住していたものと思われるが、伝承されたものは何もなく、僅かに「館野」という地名にその手掛かりを与えるだけである。



III 検出遺構

1 遺構の分布と遺存状況

古屋敷館跡は、今次の分布・確認調査によってその所在が確認された。館野という地名から、周辺に中世の城館跡に関連する遺跡が存在する可能性が指摘されていたが、その地点は未確認であった。その一因は、養蚕が盛んな折に、この地域も桑畠として大規模に造成され、主要な遺構は、その際に破壊されたことによるのかもしれない。

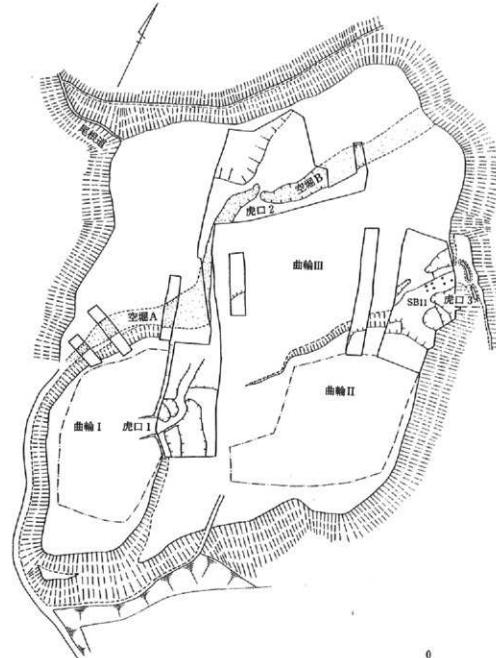
曲輪Iは、標高410m前後の最高所に位置し、主席であったと考えられる。曲輪IIは、曲輪Iより一段下がった平坦面で、副席的な性格を指摘できる。両地点とも、ほぼ全域にわたって表土を除去したが、表土がかなり薄く、表土直下がすぐ地山となり、遺構は全く検出できなかった。

D区は、曲輪Iと曲輪IIに挟まれ、北側から入り込んだ浅い谷状の凹地に設定した調査区で、曲輪Iの東側斜面の裾部に位置する。調査区の西側、南寄りに曲輪Iへ至る虎口1があり、これに連なる屈曲した通路状の遺構が検出された。曲輪Iの東斜面は、意図的に直線的に削り取った切岸状を呈する。

A～Cの各トレンチでは、曲輪Iの北東部斜面の裾にそって、空堀が巡り、D区付近で屈曲し、F区へ至っている。F区は、曲輪Iおよび曲輪IIからさらに下がった、標高406m前後の平坦面に設定した調査区で、平坦面の北西に向かって延る尾根に沿って山道が続いている。F区の北側に斜面の急激な落ち込みが検出され、斜面に沿って認められる旧表土の上位に地山に乱雑に含む土層がある。現況の平坦面は、以前の畠地造成によるものであることを示しており、本来の落ち込み線は、F区北側で検出された部分と考えられる。D区付近で屈曲した空堀Aは、斜面の落ち込み線に接近した部分で一旦途切れ、空堀Bは、ほぼ直線的に曲輪IIIの東斜面へ至るものと考えられる。その両空堀に挟まれた部分に、虎口2が想定される。

空堀に画された曲輪IIIは、調査期間の関係もあり、全域を精査することができなかつたが、その南東部にH区を設定した。H区は、曲輪IIから続く斜面と直下の平坦面に位置している。曲輪IIでは、重機によって広い範囲の表土を取り除いたが、明瞭な遺構は、検出できなかつたが、曲輪IIから続く斜面に小規模な横矢掛け状の削平地があり、直下に、東斜面から入る屈曲した堀底状の通路が検出された。また、その正面の一段高い部分に小屋掛けの跡と思われる掘立柱の建物跡が認められる。この付近に、東側から曲輪IIIに入る虎口3の存在が想定できる。

今次の調査で検出された遺構は、曲輪I、曲輪IIの高台から一段下がった部分に集中しており、主席、副席部では、何ら遺構は検出できなかつた。各調査区の土層状況を検討すると、旧表土の上に、かなり厚く再堆積土がのっており、養蚕に伴う畠地造成時に、高台部分を削平し、低い部分を埋め戻している状況が把握できる。



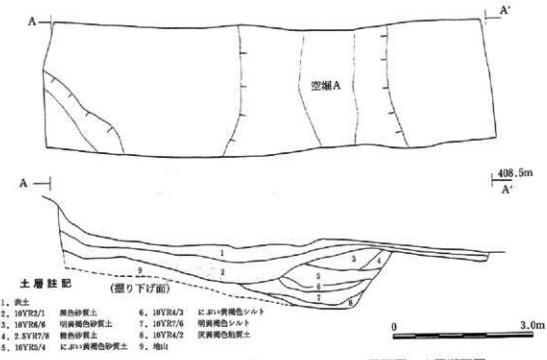
第3図 主要遺構配置図

2 各調査区の概要

(1) Aトレンチ

Aトレンチは、曲輪Iの北西部コーナーの斜面から裾部の平坦面にかけて設定した調査区である。トレンチほぼ中央に、箱型状の落ち込み（空堀A）が検出され、曲輪Iの直下に溝状の落ち込みの一端が認められる。

Aトレーニングでの空堀Aの規模は、幅約3.2m、現地表からの深さ、1.5mである。曲輪I側の斜面は、緩やかに掘り込まれているが、北西側は、急激に堀底に落ち込んでいる。トレーニング壁面の土層によると、現地表の直下に旧表土と考えられる黒色砂質土があり、以前は凹地状を呈していたと考えられる。外のトレーニングと比較すると、堀幅が狭くなり、深さも比較的浅いことから、空堀の端部に近い部分に位置していると考えられる。堀の覆土も、地山土に近い砂質土で構成される。



第4図 Aトレーニング平面図・土層断面図

(2) Bトレーニング

Aトレーニングから続く空堀Aは、Bトレーニングでは、曲輪Iの平坦面肩部から掘り込まれており、上幅で約13.5m、現地表から堀底までの深さ約3.1mを測る。曲輪I側の掘り込み斜面は、切岸状に直線的に掘り込まれているが、外側の掘り込み面は、かなり急な崖状を呈している。曲輪側の堀底に、幅50~60cmの浅い2条の溝(ED1、ED2)が検出され、その一方がAトレーニングで確認された溝の一端へ連なるものと考えられる。

ED1およびED2の覆土は、いずれも地山土に近い褐色を呈する微砂質の單一土層であり、長期に渡って開口し堆積した土層とは考えられない。あるいは、堀底の防護施設として、杭列を埋設した布堀である可能性も指摘できる。

トレーニング断面の土層によれば、断面中位に旧表土と考えられる暗褐色砂質土(5層、10YR3/3)があり、その上位は畑地造成に伴う再堆積土である。5層から下位が空堀の覆土で、堀底に黒褐色を呈する粘質な土層の堆積が認められる。旧表土の状況から、改変以前は、空堀部分は落ち込んだ凹地状であったことを示している。現在の状況は、最近の畑

地造成に伴って平坦にされたものである。

(3) Cトレーニング

Cトレーニングは、曲輪Iの北東端部に設定した17×3mの調査区である。曲輪I側の掘り込み斜面は、Bトレーニングからみるとだらかで、直線的に堀底へ落ち込んでいる。トレーニングに対して直交していないため、明確な堀幅は把握し得ないが、西壁部では、幅約11.5m程度である。空堀の掘り込み線は、トレーニングの西壁から東壁に向かって斜走しており、曲輪Iの裾に沿って巡る空堀が大きく屈曲するコーナー部に位置する。

曲輪I側の斜面の上部に、幅約1.2mの溝(SD3)がある。覆土は、暗褐色の砂質土(10YR3/3)の單一土層であり、トレーニング内での検出であるため、明確にはし得ないが、ED1およびED2と同一の性格であるのかもしれない。また、堀底部は、一部未掘であり、雨水がたまり、十分な精査ができなかった。従って、Bトレーニングに対応する布堀状の溝は確認し得なかった。

土層状況は、Bトレーニングとほぼ同じような堆積状況を呈しており、8層(7.5R3/あ3 暗褐色砂質土)が改変以前の旧表土と考えられる。その上位の土層は、人為的な再堆積土である。曲輪Iから続く斜面の中間に、わずかな傾斜変換部があり、堀の落ち込み線と考えられ、空堀覆土は、両側から流れ込んだような堆積状況を呈し、黒褐色のシルト、粘質土で構成される。

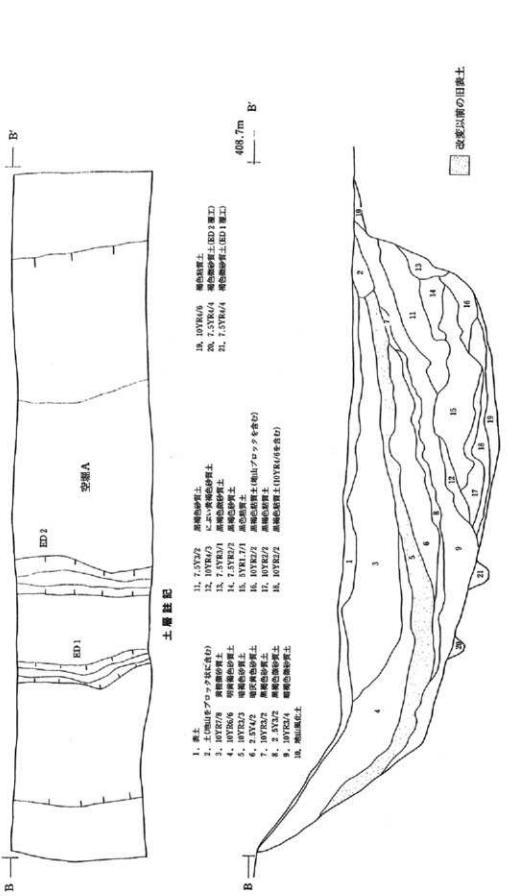
(4) D区

D区は、主廓である曲輪Iの北東部に設定したほぼ30×15mの調査区である。現況では、曲輪Iから落ち込む斜面と曲輪IIから続く平坦面にはさまれた浅い谷状の凹地になってしまっており、曲輪Iへ至る虎口状の通路が認められた。調査では、曲輪Iの平坦面が、畑地造成により、かなり削平され遺構が全く破壊されていることから、虎口状の通路部分の状況確認を主として実施した。

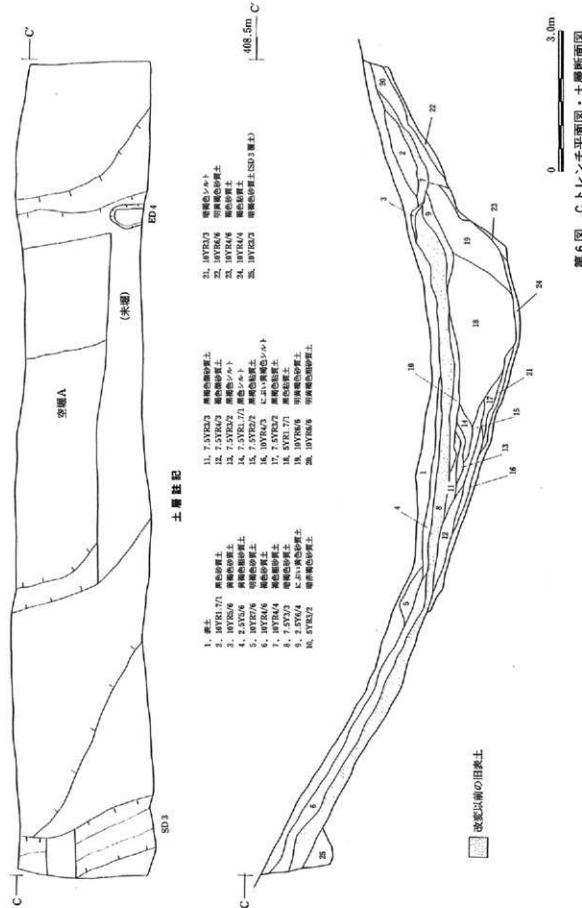
その結果によれば、曲輪Iから落ち込む斜面は、直線的な急斜面となっており、人為的に削り取った切岸で、その裾部に雨落ち溝状の狭く深い溝が走っている。虎口1は、切岸肩部に対し、やや斜走しながら曲輪Iに至るスロープ状の通路となっている。D区では、虎口1から連なり、7-10G杭付近でほぼ直角にまぎり、周囲より高い通路が検出されている。虎口に連なる通路は、周囲を削り出して造成されており、直下に深い溝が部分的に掘込まれている。幅は、特に一定しないが、約3.5m程度である。

切岸裾に接して、7-11G杭付近に幅約4.2mの帯曲輪状平場の端部が検出され、曲輪Iの裾に沿って連なるものと考えられる。

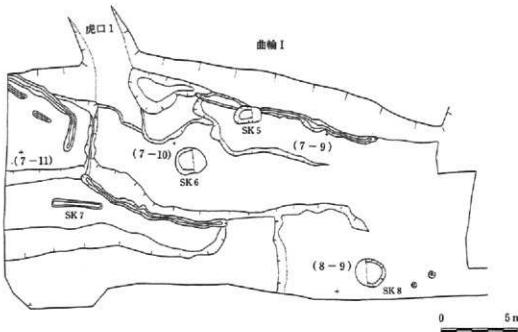
また、D区では、SK5～SK8の円形や隅丸方形、溝状の土壙が検出された。いずれもかなり深く掘り込まれており、底面に円形の小ビットが確認された。出土遺物は特に認められなかったが、周囲に数点の剣片が散布しており、縄文期の落とし穴と考えられる。D区



第5図 Bトレーナー平面図・土層断面図



第6図 Cトレーナー平面図・土層断面図



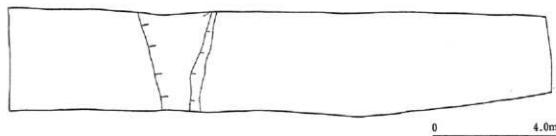
第7図 D区 遺構配置図

を設定した付近は、浅い谷状の凹地になっており、本来の地形も北側から緩く入り込んだ浅い谷の源頭部に位置していたと思われる。

(5) Eトレンチ

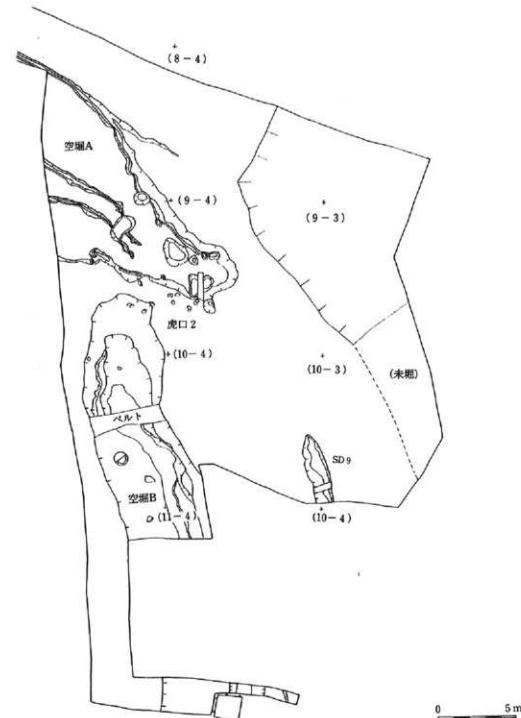
Eトレンチは、F区南方の曲輪IIの裾部に位置する17×3mのトレンチである。当初、試掘調査の段階で、曲輪Iの北側裾部で確認された大規模な落ち込みは、尾根筋を分断する大きな縦切と考えられていた。その状況を確認する目的でEトレンチを設定したが、今次調査で、空堀1はCトレンチ付近から大きく屈曲し、Eトレンチ方向に直線的に連なる状況ではないことが確認された。

Eトレンチ付近では、現况はF区を設定した平坦部とほぼ同一の平坦面であり、Eトレンチ付近が曲輪IIとした平坦部の裾部に位置している。トレンチ内の南半部に段状に落ち



第8図 Eトレンチ平面図

込む斜面が検出されたが、これは、ちょうど曲輪IIの裾に対応する部分と考えられるが、調査範囲が狭いため面的な検討ができず、確証は持てない。



第9図 F区 遺構配置図

(6) F区

F区は、曲輪IIIとした平坦面の北側中央部に設定した東西約25m、南北約25mの調査区で、東側に空堀の状況を確認するための掘削区を設けた。

曲輪Iの北側裾部にそってめぐる空堀Aは、Cトレントで大きく屈曲し、F区、9-4G杭付近で一端途切れることが確認された。一方、空堀Bは、空堀Aに斜交するような状況で、ほぼ直線的に走っており、東側に設けた掘削区でもその一部が検出された。空堀Bは、その状況から北東部の山際に向かって直線的に配置されたものと考えられる。空堀Aの掘り込み線の下場にそって、その外側部分に狭い布掘り状の溝が認められるが、内側には検出されなかった。調査期間の関係で詳細な検討はできなかったが、部分的に小さな柱穴が認められ、空堀の外側に接して柵等が設置されていた可能性もある。空堀Bでは、その断面形をみると、外側（北側）は急激に掘り込まれており、内側の曲輪IIIに接する部分は、なだらかな掘り込み斜面となっている。

また、調査区の北側にそって、東西方向に連なる落ち込み線が検出され、急斜面となって山の中腹斜面に続いている状況が認められた。現況は、曲輪IIIを含む一帯は、一面の平坦地となっているが、落ち込み線の堆積土層の検討によると、斜面に沿って旧表土と考えられる黒褐色土があり、その上位に地山土を含む乱雑な再堆積土があり、削平して山の斜面上土砂を押し出し平坦地を造成している状況が把握された。調査区の北縁にそって検出された落ち込み線は、本来の丘陵端部の状況を反映していると考えられ、北側から登って来る尾根筋に連なるものと思われる。

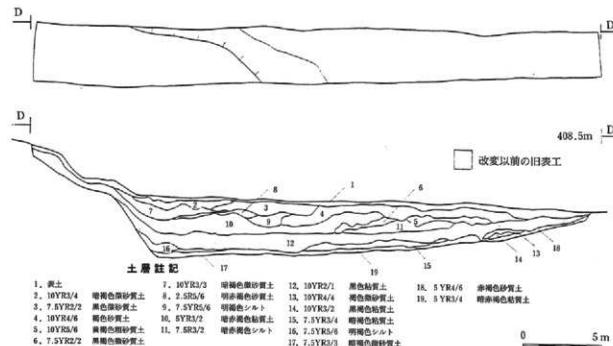
以上の状況から、尾根道を登ってきたルートは、空堀Aと落ち込み線に挟まれた狭い尾根筋を通り、屈曲して空堀Aと空堀Bに画された通路を通り、曲輪IIIに入ったものと思われ、両空堀に挟まれた部分に虎口2が想定できる。

両空堀に挟まれた部分は、幅約1.3mを測り、この部分に集中して、拳大から人頭大ほどの山石が大量に認められた。さらに、この部分にのみ、地山土を含む茶褐色土と山石が集中して分布し、人為的に石を混入して突き固め造成している状況が確認され、土橋状の造構とも考えられる。

(7) Gトレント

Gトレントは、副廓と考えられる曲輪IIの斜面から曲輪IIIの平坦面にかけて南北方向に設定した調査区で、約37.5×3.5mの規模である。トレント内の南側に斜めに走る旧斜面の落ち込みがある。この落ち込み斜面は、地山を削りとて直線的な斜面となっており、副廓端部の切岸にあたると考えられる。トレント底面の状況をみると、副廓端部には特に、防護施設と思われるような造構は認められず、緩やかに傾斜して曲輪IIIの平坦面に続いている。現況では、それ程、段差は認められないが、トレント内の副廓上の平坦部と切岸直下の裾部との比高は、約7.5mで、かなりの高低差が認められる。

トレント内の土層状況は、上位にかなり乱雑な土層が堆積しており、下位に平行な土層堆積が確認できる。トレント底面に近い12層は、黒色の粘質な土層で、同層が本来の旧表土と考えられる。その上位に堆積した土層は、地山や樹根などを雜然と含んでおり、畠地



第10図 Gトレント平面図・土層断面図

を造成する際に、副廓部の平坦面を削平し押し込んだ再堆積土である。

桑畑に改変される以前は、副廓と曲輪IIIの間には、6～7m程度の明瞭な高低差があり、副廓の切岸裾部は凹地状となっていたと考えられるが、空堀などの意図的に掘り込んだ防御上の遺構は、特に存在しなかったと思われる。

(8) H区

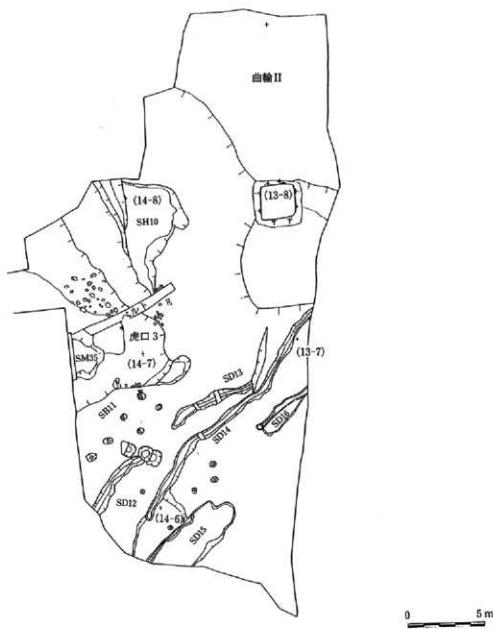
H区は、館跡が所在する台地の東縁部に設定した調査区で、調査区の東側は、急斜面となって籠の沢へ落ち込んでいる。調査区は、当初、副廓である曲輪II上の平坦面から曲輪IIIへ続く斜面、および曲輪IIIの平坦部にかけての区域に設けて、表土を取り除き造構の検出を行ったが、曲輪IIの平坦部はすでに削平を受けていたため、精査区から除外して調査を実施した。

精査は、曲輪IIから曲輪IIIに続く斜面の部分を中心に行ったが、斜面下の低い部分に集中して造構が検出された。調査区内の高台に位置する曲輪IIの平坦部にも、特に造構は残っておらず、固い岩盤状の地山が露出しており、以前にかなり削平を受けていることが確認される。肩部の傾斜変換構造からわざかに下がった部分に、幅約6.3mの帯曲輪状の平坦部があり、東側端部は、急斜面となって落ち込んでいる。その斜面下に東に向かって開口する馬蹄形状の掘り込みがあり、斜面に沿って拳大の多量の山石が張り付くように集中して検出された。斜面の中段には、山側をカットし、小規模な横矢掛けと考えられる削平地(SH10)が認められる。SH10は、長さ約5m、幅約3.5mの不整な半円状を呈する。

東に向かって開口する馬蹄形状の掘り込みは、館跡が所在する台地の東面する斜面方向

からの通路と考えられる。堀底部を通り、14-7 G枕付近からSD12、SD13のあ間から曲輪IIIへ至るルート、およびSD13にそって通路状の斜面を登り、曲輪IIへ至るルートが考えられる。調査区の東壁に接して、SM35とした土塁が検出され、削平した急斜面と、一方を土塁で囲まれた虎口の存在が想定される。土塁は、壁面の観察では、単一の土を搔き上げて造成しており、版築等の状況は確認されなかった。また、調査区内では、削平を受け、その基底部のみが鳴状に遺存しているのみである。

SB11は、虎口3を登った上の尾根状の平坦部に検出された1×4間の掘立柱建物跡である。今回の調査で確認された唯一の建物跡である。いずれの柱穴も径20cm程で、深さも浅く、簡単な小屋掛け程度の建物であったと思われる。



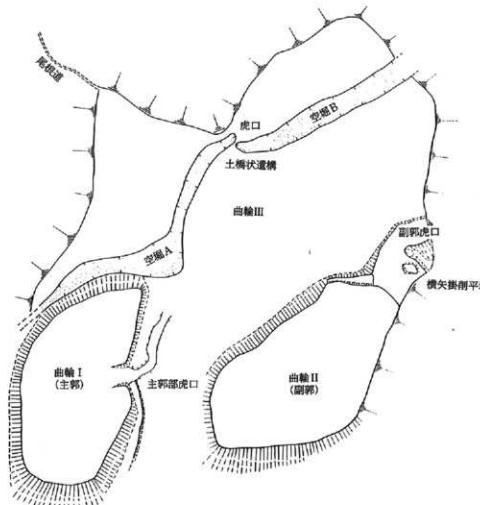
第11図 H区遺構配図

SB11建物跡に接して、SD12、SD13、SD14などの溝跡が検出されたが、これらは、建物跡と主軸がほぼ一致し、溝底に小さなビット群が並び、柵列を埋置した布堀である可能性が高い。F区で検出されたこれらの遺構は、台地の東斜面から館跡内部に通じる虎口の状況を示していると考えられる。

3 主要遺構

(1) 空堀と曲輪

各調査区の概要で前述したように、当該館跡は最高所に位置する曲輪Iを主郭とし、東側の一段下がった部分の曲輪IIを副郭、さらに下がった北側平坦面を曲輪IIIとする主要な曲輪群からなるものと考えられる。現況の各曲輪の平坦面は、戦後の桑畑造成に伴う改変によって、かなり手が加えられており、当該期の様相と規模を明確に把握することはできないが、各曲輪に伴う虎口が確認された。

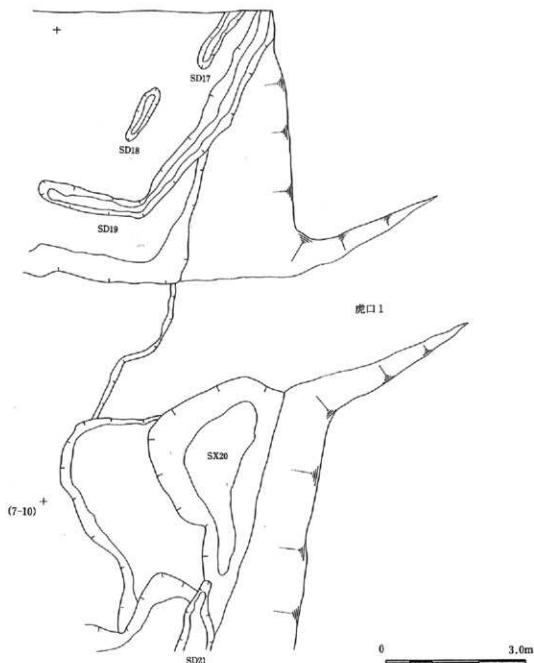


第12図 館跡概要図

今次調査は、館跡の北半部を主な対象として実施したが、南半部は、段々状の畠になってしまっており、館跡に伴う遺構は、全く消滅している。

空堀Aは、主廟の裾部を巡り、大きく屈曲してF区で検出された台地の落ち込み線に接している。一方、曲輪Bはほぼ直線的に台地の東縁部へ続いており、この二条の空堀が、尾根道を遮断する主要な防護施設であったと考えられる。

(2) 虎口1



第13図 虎口1付近平面図

虎口1は、前述したように、主廟である曲輪Iへ入る部分の虎口である。切岸が主廟部へへ屈曲し入り込み、傾斜した通路となっており、幅は2.3mを測る。虎口1から続く通路は、D区で両側を削り出し、周囲より一段高い部分が検出された。

虎口の南側で検出されたSD19は、削り出した通路にそうように屈曲しており、幅40cm、深さ25cmを測る。SD19の底面は、小さな凹凸が連続しており、虎口の前面に設置された柵列の布掘りである可能性もある。

(3) 虎口2と土橋状遺構

虎口2は、空堀Aおよび空堀Bによって区画された内側に広がる曲輪IIIへ入る虎口と考えられる。空堀Aは、その先端部で、幅3.6m、深さは地山面から約40cmを測り、端部から深く掘り込まれている。空堀Aの先端は、調査区北側で検出された丘陵端部の落ち込み線とかなり接近し、その間隔は、狭い場所で約2.1mである。空堀の外側の落ち込み線の直下に狭い溝跡(ED24)が検出され、柵列等を設置した布掘りと考えられるが、内側の曲輪側には認められない。

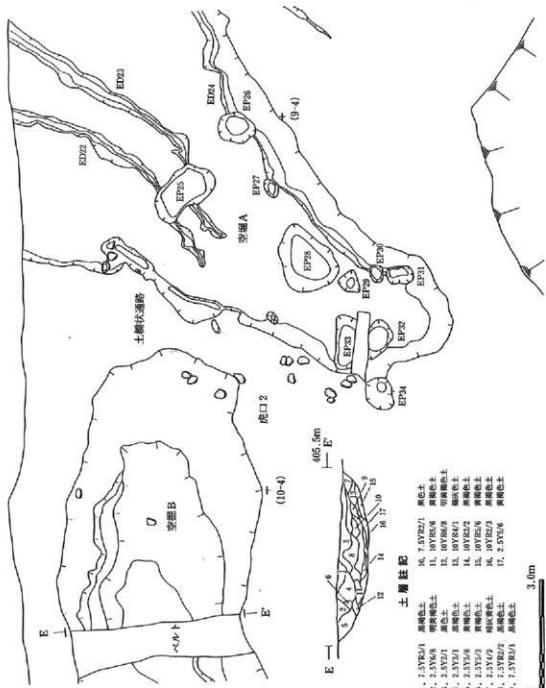
空堀Bは、空堀Aの先端部から僅かに内側に入った部分からほぼ直線的に掘り込まれ、大地の東北コーナー付近にむけたものと考えられる。幅は約5mを測り、先端部はスロープ状を呈する。底面までの深さは、約80cmである。

この二つの空堀にはさまれた部分の間隔は、幅約1.4m程度で、多量の山石が集中して認められた。山石は径20cm程度で、茶褐色土および黒褐色土と地山土を混入し、山石と共に突き固めたような状況を呈していた。立ち削りを行っていないので、明確にはし得ないが、通路として人為的に造成している様相が把握された。尾根道を登ってきた道は、空堀Aと丘陵の落ち込み線にはさまれた狭い部分を通り、空堀Aの先端部にそって大きく屈曲し、造成された土橋状の通路を通って、曲輪IIIへ入ったものと考えられる。

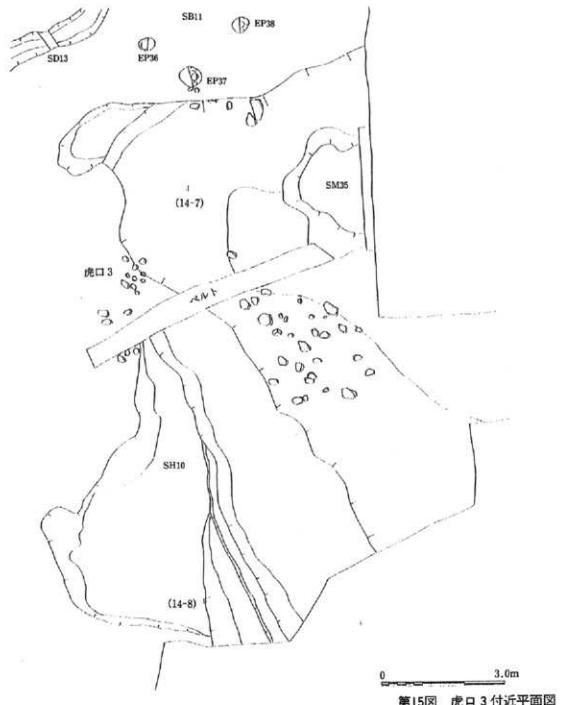
(4) 虎口3

虎口3は、館跡が所在する台地の東側斜面から館跡内部へ入る虎口であったと考えられる。台地の東側斜面は、かなりの急斜面となっており、一気に山麓の沢に落ち込んでいるが、虎口3は、その斜面に対し斜め方向から取り付くような状況で存在する。虎口が存在する場所は、台地縁辺部の傾斜変換線付近に位置し、馬蹄形状に大きく掘り込まれ、その掘り底部分を通路として確保したと考えられる。調査区外であるが、この大きな掘り込みの端部にトラス状の平坦な削平地があり、一端この平坦地に至り、掘り底の傾斜した通路を通って曲輪内に入ったものと思われる。

掘り込まれた斜面の上位に、SH10とした曲輪IIから続く斜面をカットした小規模な削平地が検出され、この部分の斜面に多くの山石が集中して分布している。SH10は、掘り底の通路に対し、斜め上方の位置関係にあり、小規模な横矢掛けの施設と推測される。また、掘り底の通路を登った先端部の右方に、SM35とした障壁状の土壘がある。調査区内では、削平されていたが、壁際に設定したサブトレーンチの土層断面では、明瞭に観察できた。



第14図 虎口2付近平面図・空堀工縦断面図



第15図 虎口3付近平面図

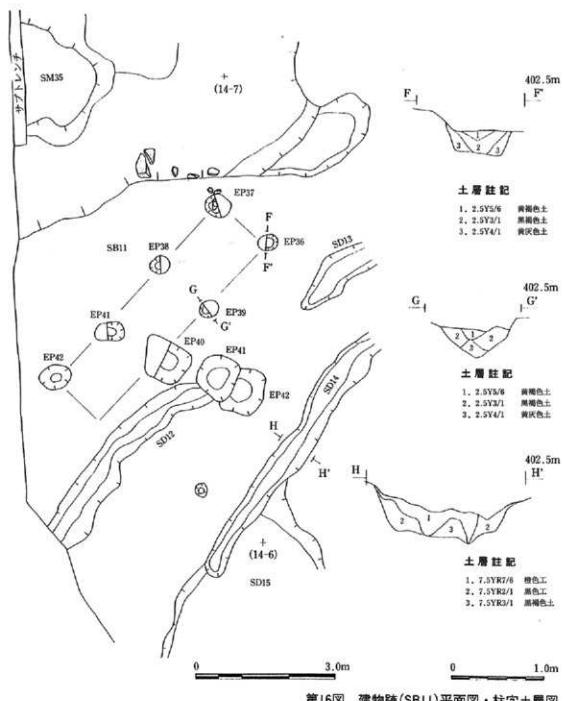
調査区内では、幅2.3m、長さ2.1mの鶴状の地山が残っており、土壌の先端部にあたると考えられる。壁面上層の検討によれば、基底部を削り出し、その上に地山の小さなブロックを多量に含む单一の土を盛り上げ築造している状況が把握できる。高さは、約1.2mである。

掘り込み虎口を登ると、その上にSB11とした建物跡があり、曲輪IIから続く斜面を進むと曲輪IIの平坦部に至ることになる。

(5) 捩立柱建物跡 (SB11)

SB11は、今次調査で確認された唯一の建物跡で、H区の虎口3を登った一段高い尾根状の小平坦部に立地する。この平坦面は、幅約3~3.5m程で北西側は、SD12、SD13の溝に画され、一段低くなり、建物跡が所在する部分が尾根状の高まりになっている。

建物跡は、1×3間の小規模なもので、桁行約5.0m、梁間約1.4mである。柱間は、1.5~1.7mで特に一定せず、EP37~EP42の各柱穴で構成されるが、北東隅の柱穴は未検出である。EP40は、径約90cmと比較的大きいが、他の柱穴は、40~60cm程度の円形や略方形を呈する。掘り込みの深さは、25~30cm程度で浅く、柱自体もかなり小さいものと考えられる。EP37では、柱穴内に根固めの山石が認められる。SB11は、梁間が1間の小規模な建



物跡であり、柱穴の掘り方も小さく、小屋掛け程度の建物であったと思われる。虎口3から登ったルートの前面に位置し、その背後から検出されたSD12、SD13の溝跡は、柵列等を設置した布壙りと推測され、虎口3を防護する施設の一部と考えられる。

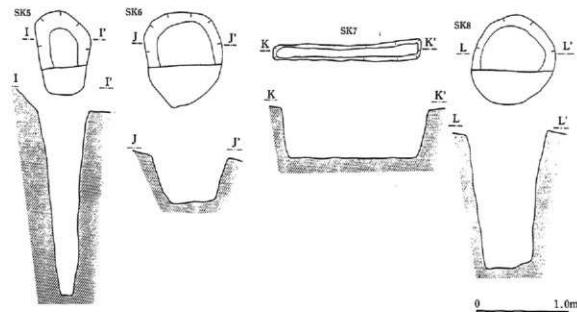
(6) 落とし穴 土壙

落とし穴、土壙は、いずれもD区から集中して検出された。D区は、曲輪Iと曲輪IIIの中間部の両曲輪にはさまれた一段低い部分に設定した調査区である。地形的には、城館跡や戦後の開闢等によりかなり改変されているが、北方から入り込んだ谷状の凹地になっていたと考えられる。土壙は、その入り込んだ谷の源頭部に集中して分布する状況が把握される。

SK5、SK6、SK8の各土壙は、橢円形あるいは円形を呈する。SK5は、90×60cm、SK6、SK8の両者は径約80cmの大きさである。SK7は、溝状の幅の狭い土壙で、長さ1.55m、幅約20cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。深さは、SK6、SK7は、約50cmであるが、SK5は、約2.0m、SK8は約1.4mとなり深い。SK5では、深さが深いために底面の精査はできなかったが、SK8では、径10cm程度の円形ピットが確認された。

各土壙の覆土は、基本的に同一で、底面に近い部分に黒色の粘質土があり、その上面に茶褐色の砂質土が認められた。SK6では、ちょうど虎口1に至る通路部分に位置しており、表面に地山土が覆っており、城館跡造成時に整地され突き固められたような状況を呈している。

各土壙からの出土遺物は、特に認められないが、SK7付近から、数点の剣片が出土した。これらの土壙は、直接城館跡に係わる遺構とは考えられず、底面に、杭を打ち込んだような小さな円形ピットが検出され、北方から入り込む谷状の凹地に獲物を追い込んで、その一番奥まった地点に土壙を掘り込んだ縄文時代の落とし穴と推測される。



IV まとめと考察

1 周辺の主要城館跡

(1) 鳥屋カ森城

木曾義仲15代の末裔、岸民部義忠は明応3年(1494)、土地の柴田兼頼を頼って関東より鳥屋カ森に来住し、柴田家はその家老職を勤めた。寒河江・大江氏の側に立っていたが、最上義光によって八つ沼城とともに攻められ、落城した。その時期については諸説がある。永禄8年(1565)最上義光の初陣時とするもの、天正9年(1581)義光が最北に進出し、庄内侵攻をめざしていた時とするもの、天正12年(1584)寒河江・大江氏の滅亡と時を同じくするものという説、いろいろあるが、共通して山形・最上氏と対立する立場にあったのである。

標高400mの館山を中心とする山城で、五百川地方から山辺町中地区に点在する諸支城と連絡を取り合っていたものと思われる。

(2) 八つ沼城（五百川城）

八つ沼城は鎌倉時代初期に築城され、大江家が寒河江庄に入部する以前にこの地方を五百川氏が支配したという。後に原氏が支配し、大江氏のもとに属し、南北朝時代には南朝側に立って働いた。

最上川左岸に位置し、標高286mの標山を中心とする山城で、東西約700m、南北約250mの山城で、山麓部の東側と西側に空堀が用意されてある。城の北・西側の春日沼（八つ沼）に向けて急峻な崖になり、南側には郭が残っている。

(3) 桅の峰館

鳥海山の北方約1kmにある標高444mの山上を中心とする山城で、周囲の見通しが良く、山形盆地を始め、寒河江方面の遠望も可能な景勝の地である。西側は山麓部までかなりの急傾斜で比高が約70mもあり、自然の要害となっている。南側は鳥海山からの尾根伝いの山道が通じているので、2カ所で掘り切られて空堀となっている。北側と東側は急斜面ではあるが、山麓部との比高が小さいので3段の曲輪がテラス状に用意され、部分的に空堀もあり、守りを固めている。

周囲の情勢を把握し易い地にあり、小規模ではあるが地形を利用してよく工夫された網張りとなっており、寒河江・大江氏の側に立って、宮宿・鳥屋カ森城の配下にあってその見張り所・連絡所的役割を担ったものであろう。

(4) 蟹沢館

荒谷丘陵から西部に突出・独立した小丘に位置し、西側は大蔵地区に向けて急傾斜となり約20mの比高があり、地区を一望にできる。山頂部は南北約65m、東西は南北で約20m、

朝日町新宿

朝日町八つ沼

山辺町大字北山

山辺町大字大蔵

北部で約47mである。直下に空堀が設けられ、その下部に数段の曲輪が作られている。東部は「家中屋敷」という地名そのままに配下の武士団の居宅があったものであろう。北部と南部は急峻であり北部には西部からのテラスが延長してめぐらされている。

(5) 荒谷館

荒谷館は、主郭として宮宿・鳥屋カ森城と連絡していた西郭と、東方・山形盆地への見晴らしが良く情勢を把握し易かった東郭、の双郭から成り立っている。

中心となる西郭（標高492m）は東部と南部が緩斜面なので二重堀を配し、北部には3段のテラスを設け、その下部は急峻である。西部は同じく急峻な地形で、山麓部との比高は百数十mとなる。東郭（標高487m）は北側と東側の急斜面に3段の帯状テラスを設けて平坦な山麓部に備えていた。全体は残念ながらゴルフ場造成のために崩され平坦な地形となり、完全に破壊されてしまった。

(6) 篠沢館

西約1kmの館山山上に立地する畠谷城の支城となり、山形・最上氏の最前線基地としての役割を担っていた。盆地状の篠沢地区の中央部の小丘を利用しており、山麓部との比高は10~20mである。丘上部は東西約90m、北東側約60m、北西側約70mといふほど二等辺三角形に近い形状をしている。直下の周囲に帶曲輪が設けられている。周縁部は道路がめぐらされているが、部分的に約1m前後の比高差がある。

(7) 館山館

北作地区の中央部にある小山とその周囲の侵食された地形を利用して築城されており、かなりの規模であるが資料が何もなく、実態は不明である。

山頂部の周辺に数段の帯曲輪がめぐらされ、すぐ下の東部と西部に空堀がある。山麓部周囲は広い範囲にわたって城郭の遺構を窺わせるものがあるが、詳細は不明である。

(8) 畠谷城

畠谷城は標高549mの館山に最初、脇坂淡路守（四千石）が築城し、その後、最上義光の信頼の厚い江口五兵衛光清（道達）が八千石で領主となり繩張を拡張し、置賜・伊達氏（後に上杉氏）に備えた単郭形式の山城である。村山（最上）地区と置賜地区との境目に位置し、数本の街道が通じているので、山形・最上氏配下の最前線基地として重要な役割を担っていた。

城郭は、「I」山頂部を中心とした主郭施設、「II」東部山麓部の大空濠群、「III」西部尾根上の三重堀、の三つの部分から成り立っている。「I」の部分の山頂部は東西約24m、南北30m、とそう広くないが、周囲に何層かの曲輪を配し、特に東部～北部～西部には空堀を掘り、北西～西部は二重堀とし、南部は急峻な崖状になっている。「II」の部分は館山と峰続きともなる東部の「尖り森」（標高575m）が位置している。その山頂は館山より約30mも高いし、両山頂間の距離は僅かに400mに過ぎないので両者の山麓部を見ると、尖り森

山辺町大字大蔵

山辺町大字篠沢

山辺町大字北作

側が急峻で攻撃し易い。こうしたことを配慮して、両者の山腹に大規模な空堀・堅堀・土塁などが切られている。「I」の部分の西部山腹部から西北方は平坦な広い尾根になり、約100m進むと「III」の三重濠になる。ここはさらに西に進むと下りになり山麓部に達するので、こちらからの攻撃に備えて濠を三重にしたものであろう。

2 本城館跡の様相と性格

今回の調査は、変電所建設工事に係る緊急調査であり、調査期間等の関係でその全域について調査することはできなかった。また、戦後の桑畑造成に伴い、曲輪上の主要な遺構は、その時点で、すでに削平されたものと考えられる。今次の調査で検出された遺構は、城館跡の低い部分に畠地を造成する際、高い地点から土砂を巻出した部分に限られる。従って、遺構は、その再堆積した土砂を取り除いた後に、旧表土からさらに掘り下げなければならず、相当量の土砂の移動が必要であった。以上のような条件のため、今次調査で、遺構の全体的な様相を把握することは不可能であり、断片的な状況しか判断し得ないが、調査で確認された遺構群から、古屋敷館跡の様相と性格について若干の考察を加えることにする。

古屋敷館跡は、館野集落の背後に連なる丘陵の北側の末端部に位置する。丘陵は、館跡が所在する付近は、台地状の高台になっており、端部から急激に高度を下げ麓へ落ち込んでいる。その端部から北西に派生する尾根にそって、麓の下芦沢に至る尾根道が続き、下芦沢には、大江氏の防衛上の拠点である鳥屋ヶ森城がある。古屋敷館跡は、最高所に位置する曲輪Iを主席とし、一段下がった曲輪IIを副席、空堀に画された部分を曲輪IIIとする、主要な3面の曲輪群によって構成される城館跡と考えられる。曲輪上の遺構の様相については、完全に削平を受け破壊されているため、状況は全く不明であるが、それぞれの曲輪に入る虎口は遺存しており、ほぼその状況が把握できた。

尾根道を登りきると、それを遮断するような状況で、空堀Aと空堀Bが存在する。通路は、空堀とF区で確認された斜面の落ち込み線に画された狭い尾根状の部分を通り、虎口2より、曲輪IIIに入ったものと考えられる。BトレンチやCトレンチで検出された堀底内の溝跡やF区の空堀Aの外側落ち込みの直下にそって走る溝跡等は、櫛列を設置した布掘りである可能性が高く、尾根道からのルートを遮断する防衛的意図が読み取れる。虎口2の両空堀に挟まれた狭い部分は、多量の山石を充填して造成した土橋状を呈し、周囲に、柱穴の掘り方が多数確認されたが、まとまりのある状況で把握することはできなかった。

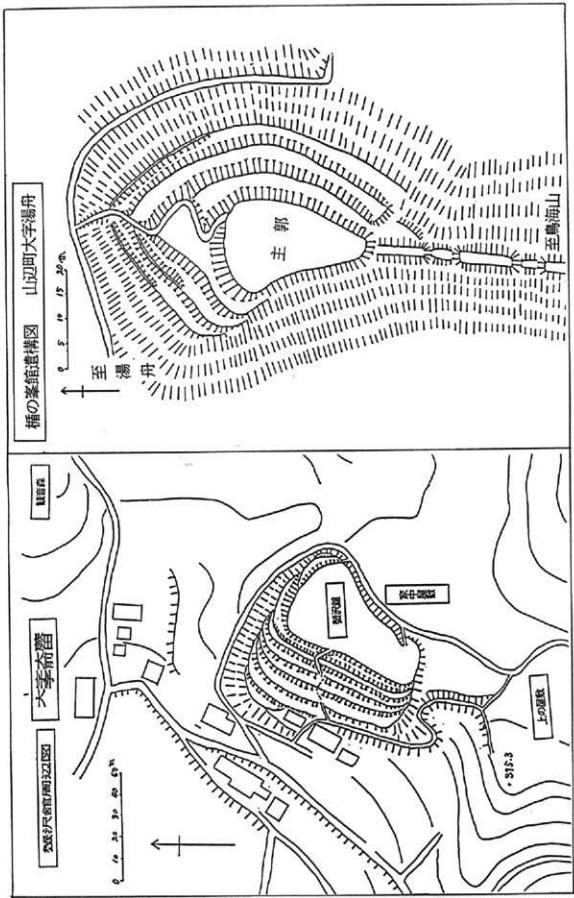
館跡の東斜面から入る虎口3は、斜面を大きく馬蹄形状に掘り込み、その堀底斜面を登る構造になっている。正面には間仕切り状の土塁があり、横方向上位に小規模な横矢掛けと思われる削平地がある。土塁の背後の一帯には、建物跡があり、曲輪IIIの平坦面に至る通路がある。一方、虎口3から曲輪IIの斜面を進むと副席の平坦面に至ることも可能である。虎口3は、館野集落方面から、東麓を流れる沢ぞいに進み、斜面に取り付いて、斜め方向から虎口3直下の削平された平坦地に入り、屈曲して館跡内へ進んだものと考えられる。

曲輪Iへ入る虎口1は、しっかりと掘り込まれ、幅も広く主席への入り口にふさわしい状況にある。D区で検出された虎口から続く通路は、両側を削り出し、屈曲した高い通路となっている。端部は調査区外であるため、そのルートは不明であるが、位置的状況からみて、曲輪IIIからの主席へ至る通路であったと考えられる。

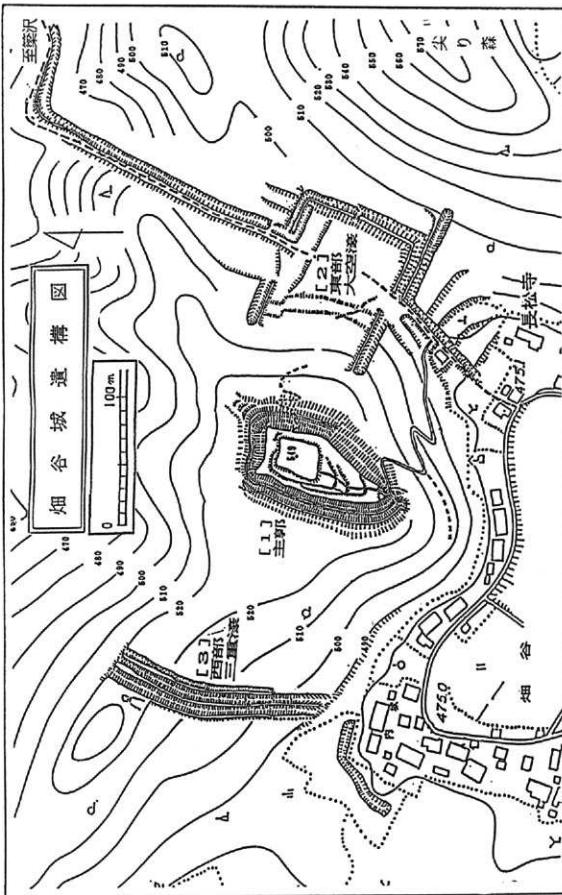
前述したように、当該館跡は、館野集落から続く丘陵の先端部に位置している。今次の調査区の南側一帯は、集落に伴う畠等のため、かなりの改変を受けているが、周辺地域の踏査によっても、城館跡にかかる施設や遺構は、確認されなかつた。空堀の状況や遺構の様相を考えれば、北西の尾根にそって登って来る道に対する防衛を想定することが可能である。このルートは、朝日町宮宿から送橋を通り、朝日町下芦沢から分岐して館野、篠差沢へ至る作谷沢の旧道にあたり、尾根筋をトレースする山道は、中世期からの古いルートであったと考えられる。

朝日町下芦沢の館山には、島屋ヶ森城があり、最上川右岸に所在する八沼城とともに、大江氏の五百川戻の狹窄部を抑える観点として機能した。白鷹丘陵の山中には、多くの城館跡が分布している。畠谷城は、最上氏の白鷹丘陵を横断するルートを抑えるための拠点であり、山辺町北作には館山館、大畠館があり、大藪地区には蟹沢館、荒谷館などが分布している。また、北山地区的湯舟には樅の峯があり、丘陵の山麓部にも多くの城館跡が築かれた。これらの城館跡は、白鷹丘陵を横断する大藪道や白坂越え、篠沢道、狐越え道などを抑える要衝に築かれている。荒谷館は、西村山の大江氏が山形盆地の最上氏に対して築いた山城と考えられており、ほぼ直線的に並ぶ蟹沢館、樅の峯館も荒谷館と同じ系列の城館跡と思われる。战国期、山形の最上氏や置賜の伊達、上杉氏、西村山に勢力を張る大江氏などの各勢力が、それぞれの地域に割拠し抗争を繰り返した。白鷹丘陵は、その地理的位置からみても、各勢力が互いに接する境目の地域に位置している。今次調査で検出された遺構の様相をみれば、最上氏に係る大江氏に対する城館跡であったと推測される。白鷹丘陵をめぐる争乱には、所謂、五百川合戦と呼ばれる最上氏が大江氏を攻めた争乱と、慶長5年(1600)の出羽合戦が著名である。五百川合戦は、天文12年と永禄8年とする説があるが、その争乱によって大江氏の勢力範囲は最上氏の勢力下に組み込まれることとなる。出羽合戦は、米沢の直江山城守を本隊とする上杉勢が狐越え道から最上領に侵攻し、その合戦で畠谷城が落城し、長谷堂城を主戦場とする攻防が展開された。調査では、出土遺物が全くなく、遺物から当該城館跡の時期を特定することはできないが、遺構の様相等から大江氏に対する城館跡と考えられ、出羽合戦に係って積極的に機能した城館跡とするよりは、天文年間にを中心とする時期を想定するのが妥当のように思われる。

さらに、これまで当該館跡は、城館跡としての認識ではなく、今次の一連の調査によって確認されたものである。戦後の開墾等により、かなり改変を受けてはいるが、周辺の丘陵斜面には、特に城館跡に係ると思われる防御施設は認められず、城館跡内部の状況も構造的には、いたって簡素である。あるいは、有事の際に於ける村の城としての性格を指摘できるのかもしれない。



- 30 -



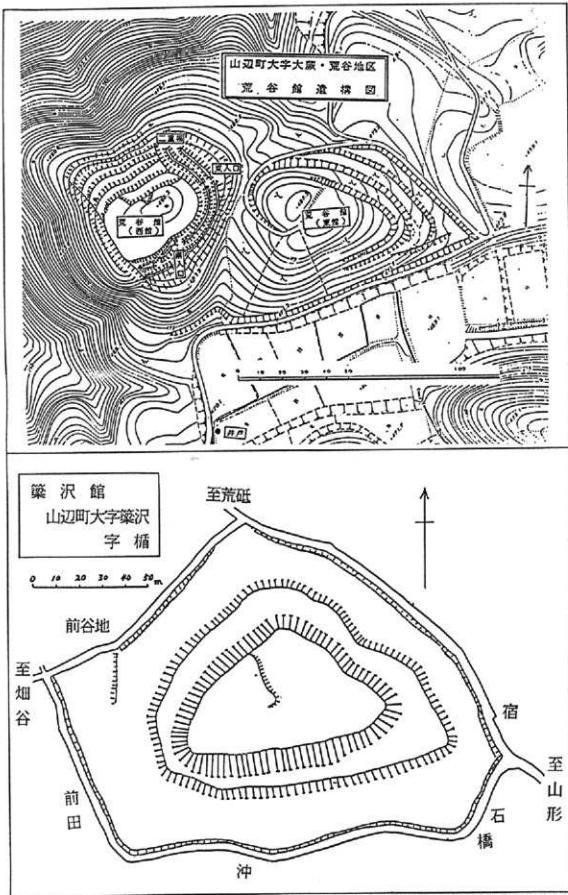
- 31 -

3まとめ

以上、述べてきたように、古屋敷館跡は、最上氏の大江氏に対する城館施設であったと考えられる。その時期は、天正年間を中心とし、一面、村の城としての性格を指摘できるようと思われる。今後、周辺地域の城館跡との比較・検討を行い、境目の地域におけるそれぞれの城館跡の性格の把握をする必要がある。古屋敷館跡は、この地域に展開した各勢力の抗争と展開のなかで存在した最上氏の城館跡の一つとして機能していたと推測される。

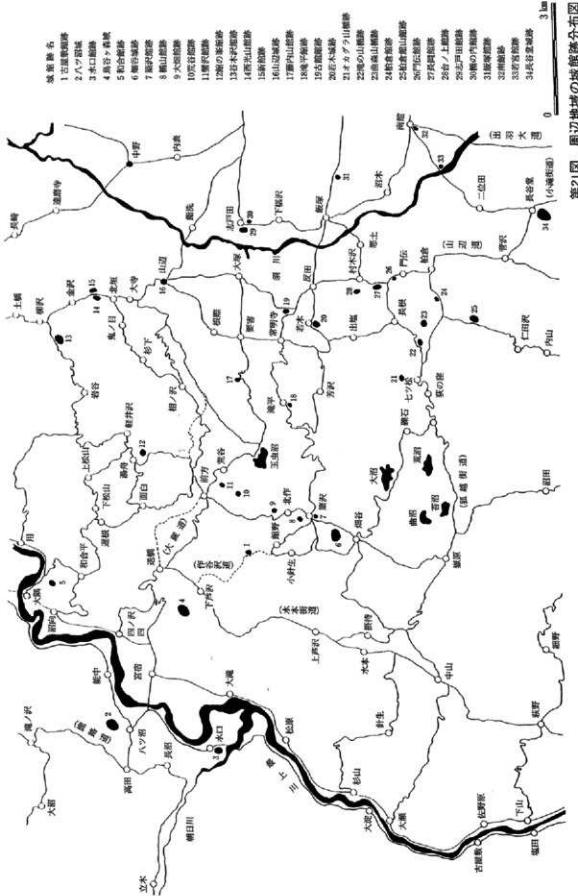
主要参考文献

- 千田嘉博 小島道裕 前川要 「城館跡ハンドブック」 1993 新人物往来社
藤木久志 「雑兵たちの戦場」 1995 朝日新聞社
藤木久志 「村の城村の合戦」 「朝日百科歴史を読みなおす」 1993
村田修三編 「図説中世城郭事典」 1987
保角里志 「城館跡からみた地域史」 「山形県地域史研究22」 1997
菅田慶信 「長谷堂城の築城プランについて」 「日本海地域史研究11」 1990
山形県教育委員会 「山形歴史の道調査報告書一小滝街道一」 1982
〃 " " " " " -狐越街道一" 1982
沼館愛三 「出羽諸城の研究」 伊吉書院 1980



第20図 周辺の城館跡縄張図(3)

図版



第21図 周辺地域の城館跡分布図

◀遺跡遠景



遺跡近景▶



◀曲輪 I 近景
(調査前状況)



◀空堀 B 調査状況



H 区調査状況▶



◀実測作業風景





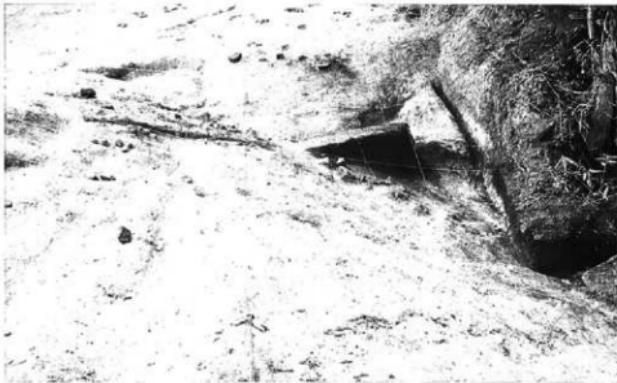


◀虎口 1 付近景

虎口 2 と土橋状通路



◀虎口 3 近景





▲SK 7 完掘状況



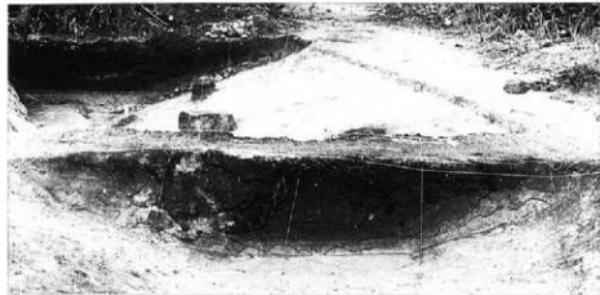
▲SK 5 完掘状況



▲F 区 傾斜変換部の落ち込み状況



▲同上 土層断面



▲空堺 B 土層状況



▲SBII 全景



▲EP37完掘状況



▲EP36完掘状況

山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書第5集

北作古屋敷館跡
発 挖 調 査 報 告 書

平成9年3月25日 印刷

平成9年3月31日 発行

発行 山形県東村山郡山辺町大字山辺1

山辺町教育委員会

印刷 藤庄印刷㈱
